



アフガニスタンで農民への医療活動と灌漑農業の展開に長年尽力されていた医師の中村哲さんが、何者かによる凶弾に倒れ、急死されたという大変悲しい知らせが入ってきました。中村さんは1989年よりアフガニスタン東部の山岳医療過疎地での診療活動を開始しておられました。しかし、2000年に顕在化したアフガニスタンの大旱魃で栄養失調、腸内感染症などが急増したことから、農民を救うには、医療活動だけでは不十分で、きれいな水の供給と、彼等が自律的に持続的に生きていける農業の再生こそ重要という決断をされ、聴診器や注射器の代わりに自らブルドーザーのハンドルを握って、水利事業に着手されました。ヒマラヤの氷河から流れ出した急流河川に堤を造り、灌漑水路を造って、砂漠化した大地を緑豊かな農地に替える農村復興を農民の先頭に立って従事し、現在では、避難民だった65万人（2017年現在）の農民の農業復帰を達成されています。

彼のこの一連の事業を讃えて、2017年2月には、地球研も共催者として参加している「KYOTO 地球環境殿堂」（注1）の殿堂入り者になっていただきました。殿堂の事務局が中村さん側にこの話をお伝えしたところ、最初はかなり躊躇されたとのことですが、アフガニスタンでの事業に、少しでもお役に立つのであれば、ということでお引き受けされたと聞いています。殿堂入り者としての表彰式のため京都に来られた時、「殿堂」の主催者側の1人として、中村さんとゆっくり話すことができました。彼はアフガニスタンで進行している干ばつが、地球温暖化の一環で進行していること、干ばつが戦争・内乱と土地の荒廃を引き起こし、大量の避難民が発生し、社会をさらに混乱させていること、そして、そのために子どもたちも含む大量の人々が、飢えと病気で亡くなっていることを指摘され、この悪循環を断ち切るには、国民の大部分である農民が、アフガニスタンの風土に合った農業を復活させることこそが一番重要であることを強く訴えておられました。中村さんの講演を聴いて驚いたのは、彼が医学だけでなく、気候や水循環、生態系を理解しつつ、伝統的な水利工学や灌漑農業技術の知識なども踏まえた智の実践をされてきたことでした。

彼の講演の最後は、「Human and Nature-Where we are going?」と書かれたスライドで締めくくられ、アフガンの復興には、軍事力や経済力・経済成長ではなく、人と自然の持続的な関係をいかに作っていくことこそが大切であると強調されました。そして、「この殿堂入りは、私にふさわしい納骨堂と思ってお引き受けし、この納骨堂入りに恥じないよう、気候変動・環境変動に立ち向うひとつのモデルとして引き続き努力していきたい。」と述べられました。

殿堂入りから2年余り、中村さんのあまりにも早いご他界に、私は、ただ悔しく、残念でなりません。彼の殿堂入りの記念講演は学ぶべきことが非常に多く、私は深く感銘しました。下記のYouTubeに収録されている彼の講演をぜひお聴きください。

中村さん、ほんとにありがとうございました。どうか、安らかにお休みください。

<https://www.youtube.com/watch?v=zuEY9Ib9wAM&feature=youtu.be>

（注1）「KYOTO 地球環境の殿堂」：

「京都議定書」誕生の知である京都の名の下に、世界で地球環境の保全に著しい貢献をされた方の顕彰を毎年1回行うものとして、平成21年（2009年）に、京都府、京都市、京都商工会議所、環境省、総合地球環境学研究所、国立京都国際会館、国際高等研究所が協力して始めた事業。9回目の2017年2月には、中村哲医師と共に、前ウルグアイ大統領のホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ氏と風土学のオーギュスタン・ベルク博士も顕彰されています。